

俵屋宗達画 杉戸絵

重要文化財

養源院で最も有名な作品のひとつが、俵屋宗達（1570 年頃～1640 年）が描いた杉戸絵である。木の板に描かれた作品で、2 枚ひと組の作品が 3 組ある。

最初のひと組には、養源院を訪れた者を出迎えるかのように 2 頭の獅子が描かれている。この神話の生き物は中国起源で、中国の寺院の入り口でしばしば見ることができる。宗達はこの獅子を、流れるような尻尾とたてがみを振りながら踊っているような姿で、薄い黄色と白で描いた。板の裏側には別の絵が描かれている。こちらには麒麟と呼ばれる、角を持った神話の生き物が描かれている。これもまた中国起源で、偉大な統治者の誕生または死を告げたり、幸運の予兆を示す生き物として知られている。麒麟は聖獣であり、草の葉を傷つけてしまうことを恐れて、地面の上を歩くことはない。したがって、通常は雲の中や水の中にいる姿で描かれる。宗達は、壮大な海景の中に、波間に飛び跳ねる雌雄の麒麟を描いた。

廊下の一番端には、非常に様式化された、しかしながら力強い 2 頭の象が描かれている。象もまた仏陀が乗る生き物と考えられている。2 頭の象は清浄を象徴する白で描かれている。麒麟と象の絵は、1600 年に伏見城の包囲で命を落とした侍たちの血がしみついた床板を天井に使った廊下の両端に配置されている。これらの絵は、死んだ侍たちの魂をしずめるために描かれた。